

ロシア語教育における オーディオ・リンガルの方法について

トルストグーゾフ アレキサンダー*

この方法はアメリカに生まれ、世界中に広く普及している。「現在では、純粋なオーディオ・リンガル・スタイルを使う教師は少数であるが、短い対話の使用、話し言葉の強調、練習重視、話す言葉の重視、4技能の分割、語彙制限の重視、段階的な進展など、その構成要素の多くは今日の教室でも一般的である。発音指導はほとんどすべて、アカデミック・スタイルを使わないときは、練習とドリルのオーディオ・リンガルのテクニックを用いる」¹⁾。ロシアの言語学者の研究によるオーディオ・リンガルの方法の内容は以下の通りである。オーディオ・リンガルの方法は、テープなどの聴覚教材を何度も繰り返し聴きながらこれを話す訓練を通じて、文法構造と文例を意識しなくても発話できる能力を獲得する方法である。この方法の特徴は、(思考によってではなく)視聴覚という知覚を重んじることである。この方法の最終的な目的は、会話と読み書きの両方のコミュニケーション手段として、言語を習得することにある。ここでの重点は、主に会話能力の拡大にある。

オーディオ・リンガルの方法は以下のような理論に基づいている。(1) 言語能力を身につけるには、話すことに慣れなければならない。(2) 母語を覚える場合を観察すればわかるように、話し言葉は書き言葉より早く覚えるものだ。話すことに慣れるには正確な聴き取りの学習と、状況に応じた会話表現の学習が必要である。(3) 慣れるということは、意識の働く必要のないほど、いわば「自動的に」発話することである。(4) 無意識でも発話できるように慣れるには、文例を何度も繰り返し練習することが肝要である²⁾。

オーディオ・リンガルの方法が、どのようなアプローチで教えられるかをみてみよう。まず、実践的教育は、次のように行われる。(1) 言語の音声システムの学習は、語彙を限定して行うこと。外国語を理解し正しく発音できる場合には、学習者は言語の音声システムを十分に把握している。音声のシステムを学習するためには、教材を模倣し、きちんとした説明を受け、母語と対比してその違いを理解させた上で、練習することが必要である。(2) 文法構造を熟知し、それを意識しなくても自動的に使いこなせるようにすること。言語を知ることは、コミ

1) ビビアン・クック著、米山朝二訳「第2言語の学習と教授」研究社出版、1993年、P191

2) Капитонова Т.Н., Щукин А.Н. Современные методы обучения русскому языку иностранцев. М., 1987, с.100.

コミュニケーションの主題に応じて語彙を組み立てて、文法を使いこなすことである。この目的を達成するために、訓練型の練習問題が行われる。(3) 作文と読解のために、学習の基礎となる文例を熟知して、同様の表現については類推によって判断することが必要である。(4) 対象となる言葉が話されている地域の国民文化を紹介すること。

授業時間の圧倒的な割合（85%）は実際に言葉を使って表現することに使われ、15%だけが説明と解釈のために利用される。

二つ目のアプローチは、会話を読み書きに先んじて教えることである。言葉を文字に書き表しても、発音、イントネーション、リズム、力点などは表示されないのだから、会話には言葉のあらゆる要素が含まれているのである。黙読するときにも書くときにも、文字記号を頭の中に考えることがある。もし学習者が話し言葉に慣れ親しみ、その結果として言語を熟知しているのでなければ、読み書きは外国語の表現に、対応する母国語を代入することになる。口頭での会話を熟知することなしには、テキストの読解は不十分なものに終わる。こうしたことから、まず口頭でのコミュニケーション（聴き取り・話し方）を熟知してから書かれた文章（読み方・書き方）を練習するべきだという、教育方法にかんする結論がでる。

話し言葉のアプローチは教育の初等段階で、少なくとも、学習者が限られた語彙の範囲で文法を使いこなす、音声システムを習得して身につけるようになるまでは、続けることが望ましい。言い替えれば、話し言葉のアプローチは、初等段階で目指す最終目的が、異言語を受容し・理解する能力（慣れ）と、限られた語彙と文法の範囲で話す能力を身につけ発達させることにある。

三つ目のアプローチは、文の構造を広範に使用することである。オーディオ・リンガルの方法を採用する論者は、伝統的な諸方法と構造言語学のアプローチに基づく諸方法とを厳格に区別する。構造言語学の観点によれば、教育するために言語の相互関係のシステムを記述することは、語句の結合と配置を文構造として記述することである。

文構造に基づく教育の目的は、学習者が模範に習って文を作る能力を拡大することにある。ふさわしい能力は文構造と文例を何回も、完全に自然に使いこなせるようになるまで、繰り返すことによって生まれる。学習者が与えられた文構造を使って作文できる能力を身に付けることは、彼らがこの文の構造を習得したということである。オーディオ・リンガルの方法を採用する論者によって導入された「慣用句」と「文の構造」という範疇は、学会で広く用いられるようになった。

慣用句というのは、会話で様々な意向を表現するために使われる定式である。慣用句の構成要素の取り替えは不可能な、あるいは不可能に近いものである。与えられた慣用句を暗記することが望ましい。

文の構造とは、会話と文書のなかの語句の配置のことである。文の構造は文そのものではない。

い。文の構造は文として実現する。同じ文の構造によって作られた沢山の文がありうる。文の構造は、練習を通じて身につく。

オーディオ・リングルの方法のうち、文の構造を基礎とする教育アプローチを開発するにあたって、以下の三つの教育法上の課題が解決された。すなわち、教育目的を達成するために基本となる文の構造が厳選されたこと、言語教育の課程が初めからコミュニケーションに基づいて文の構造を順次導入するシステムとして作成されたこと、文構造の使用を目指す練習のシステムが提示されたことである。

教育上、文の構造を選択するにあたって、オーディオ・リングルの方法を採用する論者は次のような理論的観点に立脚した。すなわち、話すという生産的なレベルと聴くという受容的なレベルとではニーズが違う。そこで、話すための文構造を選択する基準としては、文型の学習効果・使用頻度・母語の構造的形式との類似などが取り上げられた。受容的レベル（言語の聴き取り能力）での文構造を選択する主たる原則としては、頻度が重視される。このように、言語の生産的な使用と受容的な使用の区別が試みられている。

オーディオ・リングルの方法を利用する人々は、話すために必要な最小限の語彙は2000単語であり、読むためには7000単語、聞くためと書くためには3000から4000単語あれば足りると指摘している。

文の構造を導入するにあたって、教育の各段階でどのような文の構造を学習すればよいかが入念に研究された。ここでは、教育の単位として個別の単語ではなく、文が取り上げられる。文より小さい言語要素は独自にではなく、文の中の形で導入される。新しい文の構造は、つねに以前に習得した文構造と関係づけて教えられる。文の構造を提示する順序と、その習得に必要な時間を決めるには、学習者の母語との類似点および相違点が考慮されなければならない。母語と対象語との間で相違する文の構造は特に学習しにくい。二つの言語のあいだには類似点も相違点もあるのだから、言語の教育はそれぞれの言語に相応しい形でおこなわなければならない。

文の構造はトレーニングの課程で定着するので、学習時間の大多数（85%）は言語を使用する練習に割かれ、その残りが説明と解説に向けられる。この割合は心理的な裏付けを持っている。何故ならば、習得できる言語素材の量とその暗記の度合いとは、トレーニングの量に直接比例するからである。

オーディオ・リングルの方法を採用する論者は文法教育の経験を体系化し、文の構造による練習システムを開発した。このシステムは、以下の10種類の練習を含む。すなわち、言語の聴き取り能力、模倣を通じて暗記すること、構文に当てはめること、変形、質疑応答、より複雑な構文への段階的な発展、文の空白を埋める穴埋め問題、単文を結合して複文を作ること、自由会話、作文である。最初の8種類の練習は、トレーニング的もしくは入門的なタイプに属する。何故ならば、それらは言語（会話）文例と文の構造の自動利用を狙ったものだからである。しかし、文の構造を発話単位に使うことは本来の意味の言語ではない。コミュニケーショ

ンの課程だけが身につけた「慣れ」を想像的に適用させる能力を生み出すのである（ここでいう「慣れ」とは、本論文の冒頭でも説明したことだが、その言語に慣れ親しんで、意識せずとも自動的に使いこなせるようにすることを意味する）。話せるようにする想像的な練習として、自由会話と作文が推奨されている。想像的な練習の素材としては、授業の課程で討論される事柄についてのスライド、映画、文芸作品のテキストなどが取り上げられる。想像的な練習問題のシステムは、オーディオ・リンガルの方法のなかで発展しなかったのものであって、そこから分化したのではない。これは、この方法の理論的な裏付けからも説明することができる。この方法は、言語の自動的な「慣れ」を重視している。

四つ目の教育上のアプローチは、学習者の母語を考慮することである。学習者の母語はできるだけ十分に考慮されなければならない。よく言われるように、二つの言語が同じ事象についてどのような表現を取るかを比較すれば、学習者の母語と対象語の相違点を見極めることができる。このアプローチは、直接教育方法というアプローチと対をなしている。後者は外国語の教育が自然的に、直感的に、子供が母語を習うように、行うものである。

五つ目の教育上のアプローチは、言語を「慣れ」のシステムとして考えることである。この考え方は、オーディオ・リンガルという方法の出発点である。この教育体系は、言語活動の各局面で「慣れ」を養成することを狙いとする。「慣れ」は文を何度も繰り返すことによって生まれる。ロシアの教育法論者たちは、言語の「慣れ」を教育の最初の段階として考え、最終目的を実際のコミュニケーションで「慣れ」にもとづいて表現する会話能力の養成においている。

オーディオ・リンガルの方法に基づく教程では、広範に器材が利用されている。自然に話させるようになるために、音声を記録・再生する機械ばかりでなく、映像的表現を含む視聴覚教材が使用されている。その方法として主にテープレコーダを使う練習方法が開発されているが、それは四つの段階（知覚－反応－教師による補強－再度の反応）を含んでいる³⁾。

ロシア語の教育の場合、日本の学習者にオーディオ・リンガルの方法を適用するとき、日本人の次のような民族的・心理的特性を配慮しなければならない。すなわち、漢字という象形文字を使うこの民族は、目で覚えたものが耳から覚えたものより身につけやすいという傾向が、より一層強いのである。読み書きに頼らないで、聴くことだけを通じて教材を習得しようすれば、日本人の学習者は戸惑うことが多い。これにくわえて、ロシア人に比べて日本人学習者の声が弱いということもある。ある意味で、それは聴覚の感性が細やかであるということでもあるのだが、ロシア人教師の声とオーディオビジュアルの器材を使って聴き取りをするとき、聴

3) Там же, с.102-107.

くということへの集中がかれらを疲れさせ苛立たせることすらある⁴⁾。

視聴言語学法による教育課程は以下の手順で行われる。

- (1) 学習者はテープに録音された聴覚テキストを聴き取り、前後関係からその内容を理解するように努力すること。
- (2) 教員は聴き取りテキストの内容を解説し、その際、意味を説明する手段としてジェスチャー、顔の表情、直接教授法を使い、絶対に必要な場合でなければ通訳を避けること。
- (3) 対話は間隔をおいて再度再生され、学習者がそれを覚えるまで繰り返すこと。
- (4) 語彙を定着させ、その理解度をチェックするために、語彙の練習が行われる。学習の深度を確認するために、前後関係によって意味を問うような練習問題を広く用いること。
- (5) 文の構造別の練習問題、および文法的なまとめを行うこと。
- (6) 想像的な練習問題が提示されること。
- (7) 授業における学習内容を、学習者は授業外で器材を使いながら定着させる。かれらは対話を聞き、アナウンサーのあとに従って文句を復習し、アナウンサーの質問に答える。
- (8) 読みと書きの「慣れ」を養成するための練習が行われ、読まれたテキストにかんする討論は会話能力を養成する主要な手段になる。より進んだ段階では、文芸作品と専門的なテキストが用いられる。書くということにかんする宿題としては、判断力を向上させるために作文問題と要約問題とが用いられる。

授業のなかでは、言語の各局面にかんして以下のような練習が行われる。

一つ目は、言語の音声システムを実践的に熟知すること。発音の教育の目的は、対象語の音、リズム、イントネーションを理解し、正確に表現する能力を養成することにある。授業は以下の手順で組織される。

- (1) 調音の説明。その際、両言語に共通する要素、あるいは相違する要素に注意が払われなければならない。
- (2) その言語の標準的な音声の特徴を聴き取り、区別して表現する能力を養成するために、音の模倣をすること。
- (3) 音節内の音を練習すること。
- (4) 単語、単語結合、文の音声側面を学習すること。
- (5) アクセント、イントネーション、文節のリズムを訓練するために、言葉の流れに即して音をまねて話してみることに。

4) Жданов В. Н., Ямада Т. В поисках абсолюта или размышления о методе преподавания В Японии русского языка как первого иностранного. [札幌大学外国語学部紀要 文化と言語] vol.29, N1. 1995, p.228.

(6) 言葉の流れの大きな単位である段落（パラグラフ）を使って会話を練習すること。

上記の内容から明かになるように、オーディオ・リンガルの方法による練習は発音に大きな比重を置き、その際、音を模倣する訓練とともに調音の説明が重視される⁵⁾。

発音のチェックおよび反復練習は、LL教室を利用したほうが集中しやすい。例文に続けて反復する練習は、たいていのLL教材や録音機器で行うことができる。LL教室で練習するとき、もうひとつ習慣づけたいのは、モデルを使わずに学習者が自分で、教材内容を反復する能力を身につけることである。単語の発音練習がある程度進んだ段階で、例文を使わずに学習者自身に単語を吸収させる機会を与えるのである。そのことが、学習者に練習の効果を教えることにもなる⁶⁾。

二つ目の練習としては最小限基本語彙によって語彙土台を形成すること。これに付いて以下の原則を取り上げることができる。

- (1) 授業は最小限基本語彙によって行われ、語彙が機能を表す言葉、すなわち文の中で文法的な機能を果たす言葉や、語の代用、独立語などを考慮した上で、段階的に教育すること。
- (2) 初等段階での基本語彙は、発音を教え音の相違を説明する際や、文の構造による授業を行う場合に必要な、頻繁に使用される言葉に限定すること。
- (3) 基本語彙から専門的用語の学習への移行は、言語の基本文の構造が熟知され、自由に使いこなすレベルに到達した後が適当であろう。
- (4) 語彙単語の教育は、言葉の意味を前後関係から説明する形で行うべきこと。
- (5) 言葉を対象とする授業は、以下のものから構成される。すなわち、言葉を単独で聴いたり文のなかで聴いたりしながら、学習者が自分で言葉を発音すること、言葉の意味を通訳なしに説明すること、ある言葉が以前聴いたときどんな文脈で使われていたかを発表すること、言葉の話す訓練、声を出して読み書きすること、多種多様なコンテキストのなかで言葉をより自由に使用すること、などである。

三つ目の練習としては構造体（文の構造）を扱うこと。この練習は教育の初等段階の基礎として考察される。この練習は以下の段階から構成される。すなわち、模倣を通じて習得すること、新しい文の構造の自覚的選択、文型を適用する訓練、文型を自由に使用すること、である。これらの諸段階は、教育の全課程の内部構成を規定する。各段階には、それに相応しい練習問題の組み合わせがある。トレーニングの段階では次の種類の練習が勧められる。たとえば、話すための準備として、聴き取り、教員の後をついて反復して発声すること、ある語を別な語で代用して話す訓練、質疑応答による練習、変形、文の完成、習得した文の構造を使って表現を

5) Капитонова Т. И., Щукин А. Н. Указ.соч.,с.108-109.

6) 小島雅敏、初級ロシア語発音の指導方法、「天理大学学报」No.153,1987,p.36

拡張すること、文型を結合して複文をつくること、会話の実践、作文である。その中でも最も重視されるのは、代用のタイプの練習である。同時に「慣れ」を養うためには、練習のタイプが重要となる。学習者が1分に20～25の文を「再生産(レ° -ト)する」ことが求められる。

四つ目の練習は通訳である。この方法を採用する論者は通訳の使用を否定しないが、その適用は限られた範囲だけに認められる。その理由は、両言語で完全に一致するのは小数の言葉だけであり、直訳は過ちのある構文を引き起こすこと。心理的に、通訳の課程は聴き取り方や話し方・読み方・書き方などの課程より困難であり、前者は後者を習得するためには必要がないこと、などである。オーディオ・リンガルの方法を採用する論者の間でも意見は一致しないが、かれらはチェックの手段として意味を伝達する場合にのみ通訳の使用を認める。

オーディオ・リンガルの方法の長所は、以下の諸点である。すなわち、教育の目標がはっきりすること、そのための方向付けが多種多様な練習を通じてなされること、文の構造と慣用句を使って文法を熟知できること、学習者の母語を考慮した教育であること、授業のなかで対象語の国についての情報が順次紹介されること、テープレコーダなど器材の使用による練習問題を広く利用できること、などである。

この方法には以下の短所もある。言語は「慣れ」のシステムとして考えられるため、「慣れ」と能力の間に区別がなされない。言語を習得する能力の目標は、なによりも自分の考えを表現することであり、「慣れ」の養成を目指す練習は言語の能力を駆使するための準備段階でなければならない。

教材を暗記し・「再生産する」ための決定的条件としては、オーディオ・リンガルの方法が重視する教材内容の自動的な反復より、その自覚的な理解のほうがより一層大切である。

単独の文や会話の暗記は効果的な教育方法としてよく考えられがちだが、暗記した教材がかならずしも積極的に会話に使えるとは限らない。

その他に、教育における自覚性の欠如や、書き言葉によるコミュニケーションの過小評価も指摘されている⁷⁾。

(1997年12月22日受理)

9) Капитонова Т.И., Щукин А.Н. Указ.соч.,с.109-117.